

台頭する中国における東アジア共同体論の展開：戦 略・理論・思想

徐, 涛

<http://hdl.handle.net/2324/1789441>

出版情報：Kyushu University, 2016, 博士（比較社会文化）, 論文博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏名	徐 涛				
論文名	台頭する中国における東アジア共同体論の展開 ―戦略・理論・思想―				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松井	康浩
	副査	九州大学	教授	大河原	伸夫
	副査	九州大学	准教授	益尾	知佐子
	副査	九州大学	教授	清水	靖久
	副査	東京大学	教授	高原	明生

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀末から現在そして将来の東アジアの国際関係・国際秩序と、そこにおける中国の役割をめぐる政治指導者、政策エリート、学者・知識人等の言説を丹念にフォローし、それを「中国における東アジア共同体論」として独自に整理したものである。その際、本論文は、外交戦略、国際関係理論、歴史・思想（現代中国思想）という三つの視座から現代中国の言説空間に見られる東アジア共同体論／東アジア論を分析し、現代中国が発信する東アジア像を立体的に提示しているところにそのユニークさがある。戦略・理論・思想という相互に関係する3つの領域に議論を及ぼした本論文は、現代中国外交研究、現代中国研究に一定の貢献をなすものといえる。

序章では、中国の台頭と東アジア地域主義の発展を両立させることが、東アジアの平和と歴史的復興を共に可能にする最も重要な要因であるという問題意識を示しながら、先行研究の大半が、中国の地域外交戦略に議論を集中した結果、中国における立体的な東アジア像を提示できていないとし、外交戦略、国際関係理論、歴史・思想の3領域からなる複合的アプローチが重要であることを主張している。

第1章では、中国外交の中で「東アジア」が政治的意味での地域として認識されるようになった歴史過程を辿り、中国外交における東アジア／アジアをめぐる言説を分析し、中国の東アジア／アジア認識の前提となる枠組みを提示している。

第2章では、東アジア地域主義外交に見られる中国の戦略的意図を明らかにするため、1980年代末から2010年代前半にかけての長いタイムスパンで中国指導部のブレイン等が展開する議論を時系列的に追い、地政学的思考に基づく「東アジア経済政治共同体」論（1980年代末～1990年代半ば）、地域主義の戦略的価値を重視する「東アジア一体化戦略」や「東アジア安全共同体論」（1990年代後半～2000年代初頭）、国際秩序の変革と結びついた東アジア地域主義戦略論や「アジア運命共同体論」（2009年以降）等の多彩な東アジア戦略論／東アジア共同体論を取り上げ、分析している。

第3章は、中国の学界における地域主義理論の受容と新たな研究動向を検討している。当初、欧米学界の地域主義理論の学習が中心であったものの、21世紀に入るところから、中国の学界は東アジア地域主義理論の新たな構築を目指し、ネオリベラル制度論やコンストラクティヴィズムのアプローチを応用・発展させ、あるいは、国際関係論の「中国学派」を形成しようとする試みを、東アジア地域主義のイシューに関わって模索するようになった。また2009年以降、東アジアに緊張が高まったことを背景に、大国関係を重視する「大国コンサート型地域主義」に見られるリアリズムの視点が強化されたことを指摘している。

第4章では、現代中国の思想空間における東アジア論を、「近代化」、「価値・規範」、「思想的課題／思想的媒介」の三つのカテゴリーに分けて考察し、中国の描く自己像と東アジア像の深層に光を当てている。1980年代以降現れた近代化論の文脈における「東アジア（東亜）」論、思想評論誌『読書』（1996～2010）において確立された「病理分析」を中心とする東アジアの視座、竹内好と魯迅の思想を活かしつつ「主体の在り方」を問い続けてきた孫歌の東アジア論、東アジア共通文化としての儒学の再建、「和合哲学」と「東亜意識」の構築、古代東亜「朝貢システム」「華夷秩序」の揚棄、「近代の超克」を意識した新たな東アジア像、といった複数の視点から東アジア／アジア的価値の再構築が模索されていることを明らかにしている。

終章では、各章で論じてきた外交戦略・国際関係理論・歴史思想の三つの視座が相互に関連し、影響しあう側面をもつことを指摘してこれまでの議論を補足している。と同時に、中国のエリートと民衆の深層意識に共存する「中国中心主義」と「アメリカ中心主義」から脱却する必要性を主張する議論など、他者・他国の視線を意識した自省的な中国知識人の様々な議論を紹介しながら、本論文が取り上げた東アジア共同体論／東アジア論は、台頭する中国の苦悩と可能性を示していることを主張して、議論を締めくくっている。

本論文の優れた点は、冒頭でも述べたように、中国の指導者、政策ブレーンや学者知識人の展開する言説を膨大に渉猟し、それを 3 つの視座から整理・分析して重層的な「中国における東アジア共同体論」を提示したところにある。また、関連する研究への言及を含めて非常に目配りの効いた叙述が著者の高い日本語能力によって巧みに展開されている。中国外交や現代中国の知的世界を深く多面的に考察した本論文は、学界のみならず、論壇での議論にも寄与しうる価値ある作品に仕上がっており、博士（比較社会文化）の学位を授与するに十分値するものとする。